

特集

# 佐世保の 音ばなし



## 一里島

むかしむかし、ある秋のきれいな夜のことでした。月の光をあびて、島たちはのんびりと話をしていました。

そこへ、どこからか美しい笛の音が聞こえてきました。それを聞いた大将の松浦島が、

「どうや、今夜は町へ行って、久しぶりに酒を飲もうじゃなか」

と言いました。そばにいた桂島が、

「そりゃ、よか考えはい。あの美しか笛の音ば聞けば、じっとしとられんたい」

と答えました。

少し離れたところにいた美人の金重島も、髪をくしでとかしながら、

「私も連れてって」  
と言いました。

そして、島たちは松浦島を先頭に佐世保湾へ入って行きました。

久しぶりに町へ来たので、島たちは酒を飲んだり、歌を歌ったり踊ったりして夜の明けるのも忘れて、大騒ぎをしていました。

しかし、大将の松浦島は、夜明けが近づいていることに気がつきました。島たちは、夜明け前に元の場所へ帰らないと、二度とそこへは帰れなくなってしまうのです。

「おーい。夜の明くっぞ。はよ並べ。帰っぞ」

「大変はい。急がば間に合わんぞ」と、みんなは急いで帰る用意をしました。

でも一番若い一里島は、酔っぱらって寝こんでしまいました。

「一里島、早う起きんば夜の明くっぞ」

と、仲間が起こそうとしますが一里島はぜんぜん起きません。

「かわいそかばってん、しかたなか。一里島をおいて行く」

仲間の島たちは、時間がないので、

わてて帰ってしまいました。

こうして、佐世保湾の中に一里島だけが、ぼつんと残り残されています。

今でも、たくさんの船が通るたびに、一里島は、

「みんなのところに帰りたいか」となびびりそうにうなづいてくるそうです。

その時から、百あった島が一つへったので、九十九島と呼ぶようになったとさういいます。

「みんなのところに帰りたいか」

となびびりそうにうなづいてくるそうです。

「みんなのところに帰りたいか」収録



全国にたくさん残されている民話や昔話。そのほとんどは、民衆の中で生まれ、親から子へ代々伝えられてきました。時代の移り変わりとともに風化されつつありますが、本市にもたくさんのお話が残されており、今も各地域で語り継がれています。昔話の中には、歴史と異なっていたり、非現実的な内容だったりするものもありますが、民衆が生きていくために必要とした深い知識や願いなどが込められているほか、地名の由来が分かるものなど、学ぶべき話も数多くあります。今回の特集では、そのような本市の昔話を紹介します。新米市民の皆さんには佐世保を知るきっかけに、ベテラン市民の皆さんには郷土への愛着心をさらに深めるきっかけにいただきたいと思います。

# 高麗島の伝説

むかしむかしの、そのまたむかし。宇久島のはるか西の海に高麗島という島があった。

この島には、信心深い人たちがたくさんいて、村の辻、角々にはお地藏様や、観音様がまつられていた。島の人たちは、それはそれは大切にして、朝夕の仕事の行き帰りのお参りも欠かすことはなかった。

ある日のこと、正直者で、熱心な信者の夢枕に、山の高台にあるお地藏様が出てきたそうなの。言いつくには、

「島の者たちが日ごろ、信心深くしていることには、感謝している。そこで、一つ、いいことを教えよう。いつの日か、私の顔が赤くなるときが来たら島に大変なことが起きるときだから、島を離れるのだ」

そこは正直者と言われるだけの信者のことだから、会う人ごとにお地藏様に言われたことを話して聞かせるが、「わっはっはっはっは」と一笑に付す者。はたまた、「おいおい、お前さん。あんまり、

信心しすぎて頭がおかしくなったんじゃないのか」と、反対に心配される始末。それでもお地藏様の言わすことだから、ということでも会う人ごとに話して聞かせていた。

いつの世も、どこにでも、不心得者はいるもので、常日ごろ、その正直者をねたんでいた男がいた。ずら心を起こしてしまった。

朝早く山の高台に登り、お地藏様の顔を赤く塗りつぶしてしまっただものだから、さあ大変。信心深い正直者は

「ああ、やはり、お地藏様のおっしゃることは正しかったのだ。さあ、これは島の一大事。皆に知らせなきゃ」ころび、まるびつ（大慌てで）、山を降りてきて、村人に話したが、大半の人は信じようとはしなかった。

悲しいことではあったが、親戚、縁者を集め、「荷物をまとめて、すぐに島を離れよう」と説いたら、そこは、正直者の知るべきだけであって、すぐに、避難することに同意した。

その様子を見ているいたずら者は「自分のいたずらとも知らないで、鵜呑みにして、逃げまどうとはよほどの小心者よのう。わっはっはっは」と、愉快でたまらない。

そここうするうちに、正直者たちは舟を漕ぎ出し、島から離れていった。と、あるう事か、一天にわかにかき曇り、とどろく雷鳴、打ち寄せる波、うなりをあげる地響き。

村人たちは沈むはずのない島が轟音とともに、少しずつ沈み始めたので、びっくり仰天し、舟に駆け寄る者、山に登る者、それは、大変な騒動であった。

しかし、それもつかの間、島はとうとう、波間に消え、大海原だけが残されてしまった。正直者たちを乗せた舟は五島列島の各地に流れ着き、そこでも、信心深く、正直に生きたという。

今、高麗島をしのぶすが（探す手がかり）は「高麗曾根」という、暗礁のみが残り、時折、漁する舟が回遊するという。

「宇久じまんむかし話」収録



アニメ化された「高麗島の伝説」の一場面（海ノ民話のまちプロジェクト実行委員会提供）

全国から海に関する民話を5つ選び、アニメ化して子どもたちに継承する取り組みで、日本財団「海と日本のプロジェクト」の一環である「海ノ民話のまちプロジェクト」。記念すべき第1回には、宇久島が舞台の「高麗島の伝説」が昨年7月に認定され、第2回も本市の九十九島にまつわる民話「一里島」が本年7月に認定されました。アニメ化された「高麗島の伝説」は右の画像を読み取りインターネットで視聴できるほか、市立図書館で見られる予定です。「一里島」も今後アニメ化される予定です。

# 速来津姫

今から1500年ぐら前に佐世保あたりは大和朝廷によって統一されました。それまではあちこちに小さな国々があり、そこを治める王がいたようです。

奈良時代に書かれた肥前風土記という古い本の物語は、このあたりが大和朝廷によって統一されていくようすを書いたものです。

奈良時代には全国の風土や文化、風習などを記録する「風土記」が作られました。そのうちの「肥前風土記」は、現在の佐賀県と長崎県を記録したもので、その中に早岐地域のことが書かれています。

うに美しい婦人という意味の媛や単に女となっています。速来津姫だけは、身分の高い婦人という意味の姫をつけてよんでいます。みだりに使うものでない姫の字を、朝廷がつくらせた風土記に書いてあるということは、速来津姫は、朝廷から特別あつかいされる何かがあったのかも知れません。この地方で相当の勢力をもっていたのでしよう。だから朝廷の命令にしたがわなかったのに、捕えられても殺されていないようです。他の支配者たちの多くは殺されていますし、名前などもけいべつしたような名がつけれられています。

速来津姫は、天皇の家来の神代直に捕えられたとき、「弟の健津三間は健村の里に住んでいます。美しい玉を持っています」と申しあげました。神代直は弟を捕え、石上神木蓮子玉と白玉の二つの玉をさし出させました。また川岸の村に住んでいる野や篁築という人からも美しい玉を取りあ



イラスト 栗山泰文

げました。三つの美しい玉を手に入れた神代直は、これを持って天皇のおられる宇佐に帰り、天皇にさしあげました。天皇は「こんなきれいな玉がそろっているなら、具足玉国といったがよい」とおっしゃられました。それが彼杵郡となつたのです。美しい玉は真珠のことと思われまじ、今も大村湾や九十九島では真珠がとれています。

肥前風土記には「早岐瀬戸でと

れるめのはは、朝廷にみつぎものとしてさしあげている」と書かれています。

速来津姫の治めるこのあたりは、海の幸にめぐまれた国だったようです。各地に残る古墳は、それぞれの地方を支配した豪族たちの墓です。速来津姫の墓も、もしかしてこのあたりから見つかるともいれません。

「ふるさと昔ばなし」収録

# めがね岩

堺木にめがねの形をした大きな岩があります。人間の背の高さの何人分もある大きな穴が、二つ、ぽっかりとほげています。

むかし、むかし、石盛岳のあたりに、大きな鬼が住んでいました。

ある日のこと、この鬼は、石盛岳を枕にして、知見寺の丘の石にひじをかけ、足を前山にのせて、気持ちよさそうに昼寝をしていました。何しろ石盛岳から前山までもあるのですから、よほど大きい鬼だったのでしよう。

綱のような鬼の髪の毛は、袖木谷から相浦谷へ流れるように、うねりちぢれて伸びていました。その髪の中では、たくさん野ネズミや野ウサギなどが、出入り入ったりして、楽しく遊んでいました。へびなどは、自分の長さの何倍ぐらいあるだろうか比べようと、うねった髪の上をするするとはって下り、あぶなく谷へ落ちそうになりました。小鳥たちは、ピーチク、ピーチク鳴きながら、花を切ってきては髪を飾っていました。それにあきると鬼の太い髪を一本一本くわえては、あやとり遊びをしていました。それでも

鬼はぜんぜん目をさましませんでした。

そこで、一羽のいたずらな小鳥が、トンネルのように大きい、鬼の鼻の穴へ入って行って、こちょこちょ、こちょこちょと、こちょぐりました。すると今まで気持ちよくねむっていた鬼は、くすぐったくなり、びっくりするほど大きくくしゃみをしました。

それで、髪の中にいた野ネズミや野ウサギたちは、谷へころげ落ちるように逃げていきました。小鳥たちは、空までいっぺんに吹き飛んだりして、大地震がきたかと思いました。

目が覚めた鬼は、大きく背のびをして、ぐうっと両手をのびました。すると、左手は烏帽子岳にとどき、右手は相浦の愛宕山にとどきました。さらに、両足をぐうっと前山にふんばってのびしたから、前山がたまらない。石盛岳から前山までもある大きな鬼の大きな太い両足が、あの太い大きな岩をほがしてしまい、ぽっかりと二つの大きな穴があきました。

こうしてできた岩の形がめがねのように見えるので「めがね岩」と言うことになりました。

「ふるさと昔ばなし」収録



所在地 瀬戸越町(眼鏡岩寺境内)  
眼鏡に似た形状から命名された奇岩。高さ約10m、幅約20m、厚さ約6mの砂岩の1枚岩に直径約8mと約5mの巨大な穴が2つ並んでいます。数十万年前は海底にあったものが隆起し、波の作用や風化によって貫通したものと考えられています。

イラスト 栗山奉文



# 船越

「ソーレ引けドッコイショ、ヤーレ引けエンヤサー」

たくさんの人々が船に大きな縄をかけて引つ張っています。船の下には丸太を並べたコロが敷かれ、その上を木の船が少しずつ動いていきます。もうすぐ海岸です。

「ソーレもう少しだ」最後だぞー、しっかりと力を出せー、ソーレ」

やっと海へ入りました。入江に浮かんだ木の船は帆をいっぱい上げ、折からの風を受けて美しい九十九島の島々の中にその影を消していきました。

船を見送った人々は、また力を合わせ、大声をかけ合って次の船を引っ張り始めました。

「ソーレ引けドッコイショ」「ヤーレ引けエンヤサー」

むかし、むかしのことです。ここは佐世保の市内から俵ヶ浦へ向かう途中の船越地区です。佐世保湾を包むように俵ヶ浦半島が伸びており、その根元にあたる場所です。上船越と下船越の二つの小さな集落があります。

現在のように自動車や汽車、飛行機による交通が発達していなかった時代には、船がもっとも重要な交通機関でしたし、

もっとも早い乗り物でもありませんでした。ところが、船は目的地に向かう途中に島や半島、岬などがあればうんと遠回りしなければなりません。遠回りすれば風向きが変わったり、嵐にあたりすることも

あります。それで、岬や半島のつけ根や島の中央部などにせまくて平坦な地形のところがあれば、その部分で船を陸にあげ、小さな船はかつぐなり、大きな船は引っ張るなりして陸地を越しました。もちろん荷物を下ろしてひとつひとつ運び、乗客や乗組員は歩き、最後が船でした。このようないくつかから船越という地名がつけました。佐世保湾から鹿子前の方へ、あるいは逆のコースで船を越させました。

船越という地名は日本各地にあります。が、半島や島の多い長崎県では、諫早、対馬、平戸島などにもあります。いずれもむかし船を越させる近道だったところ

です。タンカーや軍艦、自衛艦の浮かぶ佐世保湾と美しい九十九島の浮かぶ海と両方の海が見える船越の高台に立ってみると、そのむかし、ひたいに汗を光らせ声と力を合わせて船を引っ張っている姿が今にも目の前に現れるような気がします。

「ふるさと昔ばなし」収録



イラスト 栗山奉文

ソーレ引け ドッコイショ  
ヤーレ引け エンヤサー



# 真祭 まつり

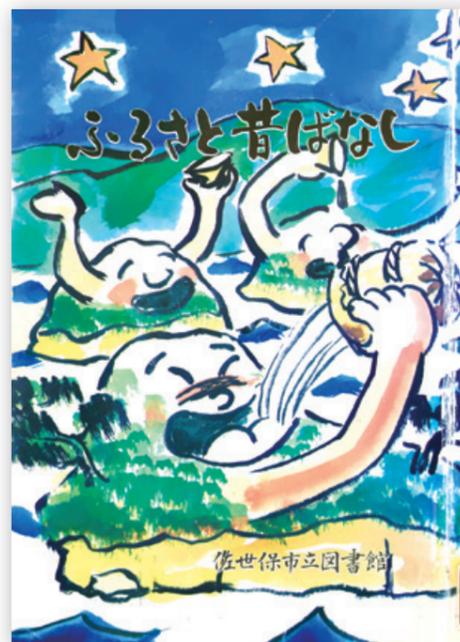
## 第22回 YOSAKOI させぼ祭り

前夜祭 **10月18日(金)** 12時～21時  
 本祭 **10月19日(土) 20日(日)** 9時～20時

名切お祭り広場、アーケード会場、海上自衛隊倉島岸壁など市内14会場  
 ことしのテーマは「真祭～新時代へのEVOLUTION～」。  
 新たに「佐世保公園会場」を開設し、「新・させぼ総踊り曲」が登場します！  
 ※一般審査員、ボランティアスタッフなども随時募集中。詳しくはお尋ねください。

問い合わせ YOSAKOI させぼ祭り実行委員会 ☎ 33-4351 <http://yosa.jp>

佐世保市立図書館所蔵



### ふるさと昔ばなし

佐世保市立図書館 出版  
 イラスト 栗山奉文  
 昭和63年3月31日発行

25の民話をはじめ、人物や地名、行事にまつわるものなど全62話を掲載しています。

#### 主なタイトル(抜粋)

特集で紹介した4話のほか「大ダコの足(針尾地区)」「葉山のお銀狸と長田山のお米狐(宮地区)」「お東のねこばげ騒動(三川内地区)」「古池の龍(早岐地区)」「ねこ山(日宇地区)」「蛇島伝説(旧市内)」「じんねみどん(大野地区)」「相浦川のカッパ(相浦地区)」「頭を刈られた源太(中里地区)」「馬鹿むこどん(柚木地区)」など

佐世保市立図書館所蔵



### 宇久じまんむかし話

旧広報うく編集委員会 著  
 イラスト 浜辺富美子  
 平成23年10月1日発行

平家盛が安住の地を求めてたどり着いたという言い伝えが残る宇久島。アニメ化された「高麗島の伝説」など数多くの民話が継承されており、そのうち23の昔話を掲載しています。

#### 主なタイトル(抜粋)

「高麗島の伝説」「海士に助けられた家盛様」「弘法様の井戸」「その人一代、家一代」「サイロ瀬、チュウガ瀬物語」「上人様の夢のお告げ」「乙女ヶ崖三浦の蘇鉄伝説」「笛の名人、龍宮に召される」「神立ち」「厄神様の笹の葉」「ナマンクサを狙うガッパ」など

まづこの2冊から  
**佐世保の民話本**



#### 民話本は「郷土資料室」にどうぞ！

民話に関する本は市立図書館「郷土資料室」(2階一般室奥)にあります。上記2冊の他にも県内各市の民話に関する本を数多く配架していますので、どうぞご利用ください。



特集に関するお尋ね 市立図書館 ☎ 22-5618